

# 震災後の小さな学びの場

## —家庭での読書会から「こどもの絵本の庭」へ—

理工学部教授 根本 泉

平成23年3月11日の東日本大震災の後、大学までの交通機関がある程度回復するまでの間、仙台での自宅待機を余儀なくされた私は、「今、私にできる生産的な仕事は何か」、という問に直面することとなった。被災地においてボランティアを行うなど、直接的に社会に貢献する体力を持ち合わせず、技術にも長けていない自分にできることは何か、と思い巡らしつつ過ごしていた私に、妻から声がかかった。それは、食糧や燃料などの物品が不足し、何を買うにも列に並んで待たなければならない、その買物の仕事であった。ただ、長蛇の列で30分も1時間も待たなければならないため、その時間を有効に活用すべく、電子辞書、英詩のコピー、レポート用紙、ボールペン等を持参し、その詩の翻訳に当てることとした。このような時期にも、細々とでも専門の仕事をしたい、との願いがあった。その英詩は、米国の詩人ジョン・グリーンリーフ・ホイットィア（1807-92年）の『雪に閉ざされて』（*Snow-Bound*, 1866年）という詩で、震災の少し前から訳し始めていたものであった。これは、マサチューセッツ州を舞台に、大雪の日々に、暖炉を囲んで、親、親類、知人が子どもたちにしてくれた昔語りをベースに書かれた長詩である。そこでは、クエーカー教徒（キリスト教の一派）である詩人によって、今は亡き親しい人々の想い出と、天国における再会への希望がうたわれている。そのような心暖まる作品の内容と勉強の継続が、困難な時期における励ましとなった。

そして、4月に入ってから、拙宅で、一人の学生と共に英国児童文学の読書会を始めた。私は、本学に勤めて暫くしてから、「C・S・ルイス・リーダーズ・クラブ」（C.

S. Lewis Readers Club）という読書会を始め、英国の文学研究者であり作家でもあるC・S・ルイス（1898-1963年）の作品、『ライオンと魔女』（*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950年）を中心に、原書で作品を読むサークルを、毎年2、3人の学生たちと共にやってきた。そのメンバーの一人で仙台在住の学生の熱意に促され、2回程度ではあったが、『ライオンと魔女』を共に読んだ。この物語は、戦争のためにロンドンからいなかへ疎開してきている4人の子どもたちが、洋服ダンスを通して「ナルニア」という国へ入り、冒険をするというファンタジーである。物語を読み、語り合うこと自体、楽しい経験であったが、それ以上に、震災後の、生活そのものにのみ心を奪われがちな時期に、読書を通して心豊かなひとときが持てたことは感謝であった。学生にとっても、大学に行くことができず、安定して勉強ができないことで、充たされない思いがあったに違いない。読書会で勉強することで、学生としてのアイデンティティーを見失うことなく、5月からの通学につなげていくことができたとすれば、大きな喜びである。

震災後暫くして、仙台から石巻への高速バスも運行されるようになり、最初に大学へ行ったのは、4月1日のことであった。この日に、本学の、初等・中等教育の研修の場である「教科教育（初等・中等）研究部会」の、有志による会合が持たれ、当時本学に避難していた家族の子どもたちの支援を行うための、打合せが行われた。支援の方法としては、本の読み聞かせ、レクリエーション、ストレッチの場の提供、等を行うこととなった。この支援は「こどもの絵本の庭」と名付けられた。こうして、

4月下旬までの約3週間、交代で子どもたちのための支援活動を行うこととなった。そして、それまで個人的に行っていた震災後のささやかな教育活動が、大学での教員グループによる活動へと発展することとなった。私としては、予想もしなかったかたちで、ボランティア活動に参加することとなったわけである。本学避難所の子どもたちも、その保護者の方々も、私たちの活動を大変喜んでくださった。

震災は、私たちが生きていく上で、肉の糧とともに、文化的な心の糧が不可欠であるという、貴重な教訓を私に与えてくれた。そのことを、今後の教育・研究活動に活かしていきたいと願っている。

1 大学の動き  
平成23年4月～

2 震災に関する研究活動

3 大学施設の地域  
催事への提供

4 震災の影響に関する  
全学調査結果

5 防災・減災のための  
備蓄品調達状況

6 震災に関する  
取り組み  
インタビューによる紹介

7 震災2年目における  
委員会等の活動と  
本学の対応

8 阪神・東海に学ぶ

9 学内に結成された  
ボランティア  
サークルの活動